



Title	<図書紹介>上羽陽子著『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼：ラクダとともに生きる人々』
Author(s)	渡辺, 眞
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 206-207
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52751
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

上羽陽子著

『インド・ラバーリー社会の染織と儀礼——ラクダとともに生きる人々』

昭和堂 2006年7月

渡辺 眞／京都市立芸術大学

インドの牧畜民であるラバーリーという特異な民族の染織を主題とし、その歴史的背景や生活背景、染色技術の解説、様々な通過儀礼における染織の役割、伝統的手芸と産業や村興しとの関係等、主題とそれを取り巻く全体が非常にバランスよく丁寧に記述されており、専門書として研究の明確な位置づけがなされているとともに、一般的な読み物としても十分堪能できるものになっています。

学位論文が基盤になっており、当然専門的な内容が中心ですが、残念ながら紹介者の私はその面での適切な評価ができる立場にはありません。しかしラバーリーにおける男性の染織手工芸に光を当てたところが著者独自の研究成果の中心を形成していると読み取れました。婚礼衣装に代表されるような女性の華やかな染織ではなく、ラクダの腹帯、乳当て袋、放牧用袋といった実用本位で、一般の目に触れることの少ない染織であることもあって、これまでほとんど研究の対象にならなかったという著者の指摘は肯けるもので、研究の独自性が窺えます。ただその報告というだけでなく、織機を用いない織に「編み」から「織り」への移行段階を見て取る可能性を指摘するなど、技術史的論点が明確に据えられています。

勿論男性の染織だけが論述されているわけではありません。第1章「ラバーリー社会」、第2章「女性の手工芸」、第3章「男性の手工芸」、第4章「ラバーリーと儀礼」、第5章「ラバーリーの手工芸とその社会的認識」という全体構成に見られるように、歴史的、社会的背景は勿論のこと、ラバーリーの染織と

してこれまで研究もされ紹介もされてきた女性の染織は当然のことであり、第4章では生活の中での染織品の役割を、誕生儀礼、命名儀礼、婚約儀礼、結婚儀礼といった様々な通過儀礼における染織品のあり方を通して見るという興味深い捉え方が示されています。特に第5章が教えられることの多いものでした。

現地に何度も行かれ、ある家族の娘という待遇をかち取られた上での調査であることもあって、本書の中で紹介されている先行研究を基礎としつつも、それと現地での生活の中での知見による比較検討から、納得のいく見解が様々に展開されています。たとえば第1章でラバーリーの社会的身分が取り上げられているのですが、インドの複雑なカースト制度をわかり易く説明しつつ、ラバーリーの位置を解説しています。ラバーリーは、いわゆるバラモン（祭司）、クシャトリア（武士・貴族）、ヴァイシャ（商人・庶民）、シュードラ（隷民）という四区分のカースト制度では少数民族として「アウトカースト」とされるのですが、生業を基盤とする「生まれ」を意味する「ジャーティ」（もう一つ別の階級制度で、日常生活ではこちらの方がリアリティがあるとされています）については、著者が調査した「ブジョディ村」には4つのジャーティが居住しているようで、バワジー（祭りを司る）、ラバーリー（放牧）、ハジャム（理髪業）、ワンカル（機織り）の4つで、バワジーは四区分カーストの「バラモン」（最上位）に属するが、後の3つは「指定カースト（アウトカースト）」で行政的には同じ扱いとなる。しかしなおそこに上下関係があり、ラ

バーリー、ハジャム、ワンカルの順であるという。著者がこれを確かめる際に聞き取り調査したのが、「下位のジャーティから食事を受け取らない」（穢れるから）という関係に基づく意識です。このような日常生活に浸透した意識を具体的に聞き取り調査しながら、その意味を探るという手法が採られているため、生活観を読み取れるものになっています。

私が特に関心を持ったのは、第5章「ラバーリーの手工芸とその社会的認識」で扱われている民族工芸の産業化、商品化にまつわる問題です。インド・カッチ県での手工芸振興活動をリードし援助する機関として1969年に設立された「スルージャン」と1993年にアメリカの文化人類学者が中心となって設立された「カラ・ラクシャ」が紹介され、ともに博物館、作業室、事務所、販売店、ゲストハウスを設けて、刺繍を中心とした手工芸品の商品化を推進し、女性たちに現金収入の道を拓いてきたことを、著者は評価します。ところがラバーリーの女性たちの参加は消極的であることが指摘され、その原因が問われています。大きな理由として、デザイン（模様）を指定され好きなように制作できないことや委託側との金銭的な問題等があることが推測されています。さらにラバーリーでは観光客が高値で刺繍品を購入したことの悪影響もあってか1994年に刺繍禁止令が出されており、伝統的な刺繍は禁止されたままです。ただしミシンの使用は許されているようで、それを利用した表現は止むことなく続いているそうです。

生活工芸は生活の必要から生まれたものですから、生活との関係（生活儀礼や意識が形を生み出し、意味、意義を託し、その継承を支える）が生命線です。しかし商品化となる時、観光客やバイヤーの嗜好に合わせたデザイン（模様や色使い）がおのずと望まれることになり、生活との関係が希薄化する可能

性を否定できない。観光客など外部の人間にとっては生活上の意味は理解しにくく、むしろ「らしさ」で満足する。伝統的な生活工芸の継承と商品化はかならずしも理想的な関係を保つとはかぎらない。この問題がカッチ県とラバーリーにおける工芸のあり方に見て取られています。

これは簡単に良し悪しを判断できる問題ではなく、決定的な解決策があるといえるものでもありません。著者は単純に一方を批判するといった姿勢ではなく、むしろ今後も見つけ続けるといったスタンスで望んでいます。ラバーリーの社会に入り込み、内部的な目をもちつつかつ研究者として客観的に観察するという姿勢をとってこられた経過もあり、どの様に展開していくのか、地域における民族工芸と産業振興の関係についての今後の研究報告をも期待したいところです。